

ICT 利活用による地域活性化について

- ICTの利活用では、ヒューマン・インターフェイスを革新的に変える必要がある。

情報機器を使用（利用）する人々の意識を、革新的に変えなければならない（水や空気のように、意識する必要のない存在となる＝アレルギーの除去）。

- 産業面での活用が不十分である（未だ、電子計算機的意識＝感覚から抜け出せていない）。
結果、労働生産性の向上にICTが寄与できていない（経営者の意識も化石化＝硬直化している）。

- 行政も同様に、未だ、電子計算機的意識から抜け出せていない。

従来のシステム構築概念（例えば、未だヒエラルキー型システムであり、ネットワーク型になっていない）から、抜け出せていない（自治体電算部門の意識変革が必要＝課題解決のアルゴリズムを変える必要がある）。

- 「地域活性化」と「ICTの利活用」

地域活性化においては、ICTの利活用は必須の手段（「極めて有力な手段」を越えて、必須）であることを証明する必要がある。

どの分野で、どの様な活用を行うのか。

従来の範疇を越える、ICT利活用の分野（方法）を考える（前例がない。自ら考える）必要がある。

日本は、技術は最高でも、活用（応用）分野を考えることに非常に弱い。

IT機器（コンピュータ）の概念を、従来の範疇から変える必要がある。

今や、チップサイズのコンピュータ時代である。

PCも、スマートフォンサイズへと移行している。

日本の社会は、概念を変えることに、非常に保守的である。

これは、どこに問題があるのか。

教育

初等教育である。

- 自由意志も重要であるが、ある意味では、**義務化（強制）**しないと変革（革新＝イノベーション）はおこらない。

「自由」では、パラダイムの大転換は起こらない。

- 国は、ICT利活用に関して、どのような共通基盤を作る必要があるのか、しっかりと捉え（考え）、後ろ戻りしない政策推進が必要である。

政権交代ごとに、方向性が変わることに、大きな問題点がある（政策がシステム疲労を起こしている＝ダウンする）。

- 誰もやったことがない事に挑戦する勇気が必要である。
パラダイムの転換、規制など仕組みの変革、既成概念からの脱却など。
スピードも必要である（判断、行動、検証）。

- 「地域」と「全体」を切り分けて考える必要がある。
地域の最適化は、必ずしも、全体の最適化とはならない。
現在は、地域よりも、全体が、政策としては重要である。
地域活性化だけでは、いつまでたっても、地域は活性化しない。

- 日本の中で、数カ所、徹底的な成功事例（モデル）をつくる必要がある。
成功事例を作るために、プロジェクトチームを結成し、そのチーム（組織）に予算をつけるべきである。
現在の地域情報化予算の活用方法（提案・公募式）では、政策効果（投資効果）は低いと感じる。

2011.02.07

高知大学国際・地域連携センター 教授

坂本 世津夫

四国情報通信懇談会運営委員長

地域情報化アドバイザー

地域活性化伝道師

「地域産業おこしに燃える人」（内閣官房・経済産業省）

<http://www.kantei.go.jp/jp/kakugikettei/2003/0917moeru.html>

燃える人ブログ：<http://blog.moeruhito.com/>